

星はやさしく光っていた（ある中学校教諭の手記より）

小学6年生のお子さんをお持ちのお母さんが、声をつまらせながら私に電話をしてみました。そのお母さんは私のよく知っている人で、大きな病院に勤めてみえるかたです。

その日もくたくたになりながら、防護服を脱ぎ、フェイスシールドを外して、病棟を離れたときには、星空がとてもきれいだったそうです。星々のやさしい光を感じながら、今日一日精いっぱい患者さんのために責任を果たしたという誇りを感じたといいます。

それなのに家に着くと、ぐったりとした表情で娘さんが涙をぬぐっていたそうです。

小学校に通う娘さんは、学校の再開をととても喜んでいました。「友達と会える」と、うれしそうに登校する姿をお母さんは見送りました。

教室で娘さんたちが先生にたのまれて配布物を配っていた、その時です。

「あっ、さわっている」という声が聞こえてきました。最初はコロナウィルスに感染しないために、他人のものはさわらないで、という意味かと思ったそうです。しかし、休み時間に手を洗っているし、他にも先生にたのまれて配っている子がいるのに、なぜ、私にだけ、とすこし不安になったそうです。

やがてその意味が分かりました。後ろのほうから小さい声で、「ばいきんがうつる」、「ニュースになった感染症の人がいる病院にお母さんが勤めているらしいよ」という声が聞こえてきたのです。

「なんで」。「どうしてばいきんよばわりされないといけないの」。「お母さんは命をかけて必死で働いているのに……」。娘さんは腹の奥底から怒りがわいてきたといいます。それでも何も言えずに、帰ってきたというのです。

お母さんはその話を聞いたとき、自分の顔が青ざめていくのを感じたそうです。

「娘さんになんと声をかけられたのですか」電話口で私はお母さんにたずねました。

「今日、帰ってくるとき、夜空の星がとってもきれいだったよ」。「お母さんはこうして家に帰っているけれど、直接患者さんと長い時間いっしょにいる医療関係者の中には、家族にうつすのが心配で、ずっと帰らずに働いている人もいるんだよ」。「……星はやさしく光ってくれていた……感染している人もしていない人も、私もあなたも周りの友だちも、みんな地球の一員なのにね……」。

それ以上のことは何も言えず、しばらくは声も出ないような状態だったそうです。

私は電話口を飛び出して、その二人のそばに駆け寄りた気持ちになりました。

